

付編 星鹿周辺の地名と歴史

星鹿の地名が文献に登場するのは、鎌倉時代の元軍襲来に関する『都甲文書』からである。弘安9年3月日の豊後国御家人都甲左衛門五郎大神惟親法師軍忠状に「右、蒙古凶徒、着岸肥前国鷹島之間、駆向当国星鹿、彼七日〈巳時〉寂妙渡当島、於東浜依致合戦忠、寂妙子息四郎惟遠令分取尋とある。弘安の役（1281）の際の鷹島合戦では、星鹿が日本軍の拠点となっていたようである。また、『五條文書』弘安7年4月12日の「筑後国木小屋地頭番西小太郎度景申弘安四年閏七月五日於肥前国御厨子崎海上、蒙古賊船三艘内、追懸大船致合戦」と、『武雄神社文書』永仁4年8月日の肥前国御家人黒尾社大官司藤原資門軍忠状に「右、異賊襲来之時、於千崎息乗移干賊船、資門乍被疵生虜一人」とあり、星鹿の沖（千崎沖）で海上戦が行われ、多くの戦死者が出たようである。これらの鷹島付近での合戦の様子は、『竹崎季長絵詞』にも詳細に述べられている。

文永の役（1274）、弘安の役（1281）2度に渡る元軍の襲来によって、松浦地方が大打撃を受けたことは明らかであり、この元寇にまつわる地名も残っている。追出、逃ノ浦、血田、血田辻などが小字名として残っており、「大堂」の森に戦死者たちの塚をつくり、供養した千人塚が6基ほど残っている。

近世においては、星鹿村は平戸藩領の一部で、田平筋に属していた。村高は、「慶長9年（1604）平戸分領并壱岐島田畠惣目録」373石余、「元禄12年（1699）郷村帳」289石余、「天保5年（1834）天保郷帳」793石余、「明治元年（1868）旧高旧領取調帳」1,311石余。「元禄12年郷村帳」では星鹿村の項に親村と肩書があり、星鹿村枝村として岳崎村の名と村高84石余が記してある。また、星鹿村の浦として星鹿浦・川原辺田浦の名も記している。同じく「天保郷帳」でも231石余と記してある。岳崎村は「元禄郷村帳」・「天保郷帳」でも独立した村として見えることから、江戸時代初期には星鹿村のうちに含まれていたが、江戸前期までに星鹿村から分村したことがわかる。「旧高旧領取調帳」では星鹿村の村高には、岳崎村の名が見えず、星鹿村のうちに含まれているとみられ、幕末・明治維新期までに再び星鹿村に編入されている。明治4年平戸県を経て、長崎県に所属する。同11年北松浦郡に属す。同7年星鹿小学校、同8年青島分教場が開設している。同16年の「郡村誌」によれば、村の幅員は東西約15町、南北約34町あり、村内には岳崎免・下田免・牟田免・北久保免・青島免に分かれ、税地は米459石余、戸数559戸、人口は男1,151・女1,161の計2,312人である。学校は字小橋に星鹿小学校、青島に青島小学校があり、神社には村社の神園神社・熊野神社・七郎神社・姫神社・綿津見神社・木元神社・平野神社・南市神社・素盞鳴神社がある。寺院では浄土宗西方山淨土寺が記載してある。

近代においては、明治22年市制町村制施行により星鹿村となり、岳崎免に村役場を設置しており、昭和15年まで北松浦郡の自活体名となっている。大字は編成されずに、北久保免・牟田

免・下田免・岳崎免・青島免の行政区となっている。明治24年の『徵發物件一覽表』によると東西8町、南北1里13町、戸数543、人口2,427人である。同30年星鹿村共同販売所（魚市場）が開設、同38年星鹿郵便局開通、同45年いわしさし網が導入。大正6年川原辺田缶詰製造所開設。同4年の戸数503、人口2,891、同9年世帯数556、人口2,811、昭和10年世帯数538、人口2,917。昭和16年1月1日新御厨町の一部となり、星鹿村制時の各行政区は、新御厨町の行政区に継承されている。

昭和30年新御厨町・志佐町・調川町・今福町が合併して松浦市となり新御厨町のうち旧星鹿村の地域を星鹿町と冠称している。北久保免・牟田免・下田免・岳崎免・青島免の行政区がある。世帯数・人口は昭和45年687・3,083、同55年687・2,997。同37年に星鹿城山・青島が北松県立公園に指定されている。

昭和43年導入されたハマチ養殖は、星鹿・川原辺田を中心として発展し、県下を代表する漁獲高をあげているが、近年魚価の低迷、養殖による港内の汚染によって養殖筏が沖合に移動している。星鹿ジャンガラは、昭和47年に市の無形民俗文化財に指定されている。

〈参考文献〉

松浦市史編纂委員会 『松浦市史』 1975

松浦党研究連合会編 佐賀県史料集成（抜粹） 『松浦党研究第5号』 1983



浄土寺境内で行われる星鹿ジャンガラ